連休に読んだ本

図書館係　阿部健治

「伊坂幸太郎は好きじゃないんですね。」と隣席の星野先生に突然言われて、ギャッとなった。伊坂は本屋大賞の最多ノミネート作家だが、筆者は一冊も読んでいない（星野先生、忙しそうなのに、４月号の本屋大賞ノミネート作品の表で、太字になってなかったの、ちゃんとチェックしてくれてたんですね。）。

本屋大賞のノミネート作は皆オススメだと言った（もちろんこれを下ろす気はないですよ）けど、やはり少々苦手な作家というのはあって、有名どころでは伊坂と森見登美彦がそれなのだ。伊坂は『アヒルと鴨のコインロッカー』（濱田岳が初々しい。それに瑛太がすごくカッコイイ。男から見てもほれぼれするよね。）、『重力ピエロ』、『ゴールデンスランバー』等は映画で見て、すごさは十分わかっているつもりなのだが、暴力的なものがいやなのか、ちょっと自分でもはっきりとはわからないのだが食指が動かない。森見も相性が悪いらしく代表作の『夜は短し歩けよ乙女』が最初から楽しめなかった。筆者は酒が飲めないので、酔っ払って夜の町を闊歩する主人公には、どうにも感情移入できないのだ。

ただ、伊坂や森見に熱烈なファンが数多くいることは肌で感じており（昨年まで勤めていた学校で森見ファンの女子生徒に猛烈な抗議を受けたし、この学校でも伊坂ファンと言う人に既に三人も接しているので…）、彼らの価値を認めることには全く異論はない。

冒頭でこんなことを書いたのは、**多くの人に評価された書物というのは必ずそれなりの良さがあるはずなので、読書への門戸は広く開けておくべきだ**という思いがあるからだ。私に国語を教えてくれたのは、後に本校の校長も務めた先生だったが、常々森鷗外の『渋江抽斎』が最高の名文だということを言っていたので、**根は素直な**筆者（一部では「頑固だ」という人もあるようだが）は、国語教師としてこれは解決せねばならないと決意して、20 代、30 代、40 代とだいたい 10 年ごとに挑戦して、３回目にようやく少しはその意味がわかった気がした。この書には「ドラマ」が全くなく、幕末の医師の生活をたんたんと綴るだけだから少なくとも胸は躍らない。しかし、鷗外は「そこにこそ人生の本質がある」と言っているのだろう。これを理解するのには読み手にも歳月が必要なのだと思った。

そんなわけで、多くの人が評価する作品にはとりあえず首を突っ込んでみることが大切だと思って、バラエティに富んだ本屋大賞ノミネート作品（群）をオススメしたわけである。最初は自分が面白いと思う作家や分野をどんどん読んでみるのがよい。そして読書の習慣や地力（変な言い方だが）がついたら、やや異質と思えるものに挑んでいくとよい。そういう過程を経て、「これは」と思える書物に出会えた喜びは人生における最高の経験の一つとさえ言えると思う。

さて、では本題に入ろう。

本屋大賞ノミネート作品一覧をもう一度見渡してみたら、自分が読んだのは 33 作。全 162 作のわずか 20 %に過ぎないことがわかった。そこで猛省（？）した筆者は５月の十連休などを利用してこの比率をもう少し高めようと考え、近藤史恵『サクリファイス』（2008・２位）、柚木麻子『ランチのあっこちゃん』（2014・７位）、『本屋さんのダイアナ』（2015・４位）、辻村深月『島はぼくらと』（2014・３位）、小野寺史宜『ひと』（2019・２位）等を読んだ。読破率は 23,5 %に上った（まだまだですけどね。１／３超えたらちょっと格好がつくかな？）。皆よい本だったので、簡単にコメントしてみよう。

近藤の『サクリファイス』は自転車ロードレースの話。自転車レースは風を避けるのが一番の課題（先頭でずっと風にさらされると潰れてしまう）なので、必然的にライバルとの駆け引きやチームプレーが大きな要素となる。筆者はこれを漫画の『弱虫ペダル』（2008 〜）で知ったが、それ以前（『サクリファイス』は 2007）に文芸作品があったわけだ。「サクリファイス」とは「犠牲」で、冒頭にすごい自転車事故が描かれるが、誰が事故に遭ったかは明かされない。この謎、もちろん最後には明かされるのだが、上手に意外性を演出しており、これだけで読者を引っ張っていく作者の筆力には感心した。事務の大森さんも購入図書に推薦してくれた作品で、ミステリとしても人間ドラマとしても文句なく楽しめる。

小野寺史宜『ひと』は、飯塚仁先生が購入図書に奨めてくれた作品。主人公は鳥取から東京に出てきた私大生だが、高校時代に父が自動車事故で死んだ後、今度は母が突然死して、大学も辞めざるを得ず、東京でたった一人で暮らしていくことになる。ここから、彼はまわりの人たちとの関係を一つ一つ作ってはそれを積み重ねて立ち直っていくのだが、これが実に自然に描かれていて感動的。骨太の作品である。最後は高校時代のクラスメートと東京で再会して恋仲になりそう…なところで終わるのだが、彼女はエリート大学生と付き合っていた。この男と主人公の比較が実に面白く、足女生には興味深い課題だと思うので、是非読んで意見を聞かせてほしい。君たちはスマートで何事にも合理的なエリート大学生と、たくさん歩かせられる主人公のどちらを選ぶだろうか？

いちばん感心したのはやはり辻村深月の『島はぼくらと』。本当に良い作品だ。瀬戸内の小島に住む４人の高校生（朱里、衣花、源樹、新）はフェリーで本土の高校に通っている。そのため部活動に参加することができない（演劇台本を書く新は演劇部に所属してはいるが）。また、網元の娘衣花だけは受験せず島に残るが、他の３人は大学進学で間もなく散り散りになる。こういう宿命を日々感じ、受け入れながら４人の高校生活は残り少なくなっていく。その彼らに「島の生活の**豊かさ**と**せつなさ**」を強く刻印させるきっかけとなるのが「**幻の**脚本」だ。ミステリで腕を磨いた辻村はこういう小道具の使い方が実にうまい。筆者は常々、こういうのを味わえるのが本当の国語力だと思っている。辻村の作品は実にバラエティに富んでいて楽しめるので、たくさん読んで是非国語力を磨いてほしい。

柚木麻子に触れるゆとりがなくなった。この人の本もとても面白いのでこちらは次回の図書館だよりに回したい。

要注目！ 柚木麻子と原田マハ

図書館係　阿部健治

まず、先月、書き切れなかった柚木麻子のことを書こう。

彼女は若いが既に実力派作家と言うべき存在だ。本屋大賞でも『ランチのアッコちゃん』（2014 第７位）、『本屋さんのダイアナ』（2015 第４位）と２回ノミネートされている（2018 には柚月裕子という推理作家が『盤上の向日葵』という作品で第２位となった。名前が似ていて筆者は最初同じ人かと思った。この人の作品もまたいいのだ。）。また、2015 に刊行された『ナイルパーチの女子会』は第 153 回直木賞の候補作になり、受賞は逸したが、後にこれが第 3 回**高校生直木賞**を受賞するのである（「高校生直木賞」は直木賞の候補作の中から高校生の代表が自分たちとして最も面白かったのを選ぶというもの。この企画は昨年で５回目で、文部科学省も後援するようになり、年々充実度を増している。毎回、直木賞本賞の作が選ばれないところが面白い。）。

さて、これらのうちで、足女生に最もオススメなのは『本屋さんのダイアナ』だ。主人公の女の子ダイアナ（なんと「大穴」と書くのだ！）と親友の彩子の「スレ違いと再会」が実にリアルに描かれている。筆者はこれを読んで、「女の子同士って難しいな（男はほんとに単純なので）。でもそれを乗り越えた女子の友情ってすてきだな。」と思った。足女生なら筆者よりずっと深く読み込めるだろう。

『ランチのアッコちゃん』は悩めるＯＬが懐の深い女上司に救われる話で、ほっとさせられるいい話だ。柚木ファンに言わせると彼女の作品には「白柚木」と「黒柚木」があるそうで、前者の代表がこの作品ということらしい。そして、後者の代表が『ナイルパーチの女子会』。これには圧倒された。「ナイルパーチ」は外来生物で、習性として他の生物を食い荒らし、生態系を壊さずにはいられない存在だ。主人公は美人で高学歴、本来ならモテモテのはずなのに、気がつくと男も女も自分から離れて行ってしまう。彼女は「自分はナイルパーチだ」と思わざるを得ないのである。そういう自分を代弁してくれるように感じたブログを見つけた彼女はその主婦ブロガーに夢中になり、ストーカーにまでなってしまう。何ともせつない展開だが、読まずにはいられない怪作だ。高校生代表たちはよくこれを選んだ（ちょっと背伸びしている感じがしないでもないのだが…）ものだと思う。いずれにしても柚木が要注目の作家であることは間違いない。

最近、読んだものの中で、特にこれは自分と相性がいいなと思ったのは原田マハ。彼女は『楽園のカンバァス』（2013 第３位）、『暗幕のゲルニカ』（2017 第６位）、『たゆたえども沈まず』（2018 第４位）と３度、本屋大賞にノミネートされている。これらはすべて「アート小説」と呼ぶべきもので、彼女のキュレーター（美術館の展覧会企画担当者）としての経験が見事に生かされており、「絵画」あるいはそれへの情熱がいかに人間を大きく動かすかを教えてくれる。「おシャレ」だし、「大人」だし、ミステリ要素もふんだんに入っているので、最後まで一気に読まずにはいられない、そんな作品群だ。これらが原田マハの表芸なのは間違いないが、実は筆者が足女生によりオススメしたいのは以下に記す２作だ。

一つはデビュー作の『カフーを待ちわびて』だ。第１回日本ラブストーリー大賞を受賞し、映画化もされている（未見。是非見たいのだが…）作品。沖縄・与那喜島で雑貨店を営む明青（あきお）の元に、ある日、一通の手紙が届く。漁師の父は海で亡くなり、母は彼が小学生の頃に消えてしまって明青は一人暮らし。そこに「あなたのお嫁さんにして下さい」という手紙が来て、その後まもなく本当に女性がやってくる。事情も聞けないまま、一緒に暮らし出す二人だったが…、という展開だ。どう？読みたくなったでしょ。

もう１つは『でーれーガールズ』という作品。「でーれー」とは岡山弁（他に「ぼっけー」「もんげー」というのもあるらしい）で「すごい」という意味。原田マハは父の仕事の都合で高校時代だけ岡山で過ごしたらしい。その経験を元にした作品で、1980 年の女子高校生が活写されている。これを読むと「女子高校生」（の時代）というのは本当に特権的だなと思う。40 年前のことだから今とは全然違うこともあるが、ああ同じだなと思うことの方が断然多い。主人公は夢見がちな漫画家志望女子高生で、（お決まりの展開だけど）親友を深く傷つけてしまって、それから…。面白さは保証します。

今期の直木賞（７月 17 日発表）候補作はすべて女性作家の作品で、柚木と原田も入っている。どうなるのか、結果に注目したい。

６月６日に小説家田辺聖子が亡くなった。「大阪のおばちゃん」的作家の代表で、自伝的小説『芋たこなんきん』が NHK 連続テレビ小説（朝ドラ・2006 下半期）の原作となったことや古典（特に『源氏物語』）に関わる文章が多いことで知られている。しかし、筆者にとっては短編『ジョゼと虎と魚たち』の作者であるということが何より大きい。これは犬童一心監督、池脇千鶴、妻夫木聡主演で映画化されたのだが、この映画、筆者のベスト１なのだ。足の不自由な女の子（池脇）が特に取り柄もない大学生（妻夫木）と知り合い、恋仲になる。二人は本当に相性がよかったのだが、彼女には常に別れの予感があった。そして、懸念の通り別れが訪れるのだが、彼女は最後まで涙を見せなかった。その健気さ、筆者は彼女がいとおしくてたまらなくなった（池脇の演技も抜群によかった）。「恋」の素晴らしさと難しさをしみじみと感じさせる名作で、映画を見てから原作（短編ですぐ読めてしまう）を読んだが、映画とはまた趣が違ってとてもよかった。田辺の作品の素晴らしさは、現在日本屈指の作家とも言える川上弘美が朝日新聞に寄稿して語った通り（図書館前の掲示板に貼ってある）である。1987 の作品だが全く古さを感じさせない。足女生にも是非読んでほしい作品である。

３年前に本校で講演した文芸評論家加藤典洋も５月 16 日に亡くなっていたことが報道された。『もうすぐやってくる尊皇攘夷思想のために』という本には、本校での講演記録が載っている。そこには本校の名前がしっかり記されているが、これはすごいことだ（同様の講演を他ではしなかったわけだから）。この講演の価値を、招聘した阿見先生が述べている（やはり図書館前の掲示板）が、惜しくも講演に接し得なかった現足女生は是非、本を読んでほしい（読みやすいし、それほど長くもない）。話の肝は「メンドーさこそ人生の楽しみの根源だ」ということだと思う。どうしてそうなの、と思った人。あなたは絶対読むべきです！

漫画家の誠意

図書館係　阿部健治

『文豪ストレイドッグス』(「ストレイドッグス」は「野良犬」という意味のようだ）という漫画が人気らしい。文豪（中島敦・芥川龍之介・太宰治ら、教科書でもお馴染みの人たち）がイケメンキャラクターとして登場し、探偵とその敵側に分かれて戦うという内容で、更にそこから小説版も出ている。

その小説版の『文豪ストレイドッグス』の第１巻を読んだが、そこでかなりの活躍を見せているのが「太宰治」だ。太宰は未遂も含め３回も心中した「死にたがりのモテ男」だから、とても使いやすいキャラクターなのだ。話の展開もスピード感があり、アクション物として面白く読んだ。作者の「朝霧カフカ」は文豪たちについてもかなりの教養があり、文章も悪くないので十分鑑賞に堪える。こういうところから「文学」に親しんでいく、というのもアリなのだろう。

太宰治はとにかく人気のある作家である。特に作家筋から取り上げられることが多い。2003 に『蹴りたい背中』で芥川賞を受賞（19 歳最年少）した綿矢りさは小説を書き始めたきっかけとして「高校生のときに太宰治に感銘を受けて全集を読んだこと」を挙げているし、結婚、出産をへた 2017 には太宰の自分への影響について聞かれて、「すごく太宰が好きだったので、こんなこと言ったりやったりしたら、太宰が怒るかなって…。今では太宰が注意してくることもだいぶ減りましたけど（笑)。」と答えている。

また、2015 に悩み苦しむ芸人の姿を描いた『火花』で芥川賞を受賞した又吉直樹は中学生時代、太宰治に衝撃を受けたと言う。

「太宰って共感させる力がムチャクチャ強いんですよ。なんでおれしか知らんことを書いてんだろう、と。あと、物語を破壊することとか、物語がどんどんひっくり返って、どれがほんまなんかいな、みたいな構造になっていることとか、小説家としての発想にも驚かされる。哀愁もあって、何より笑えるし。太宰ショックと相前後してダウンタウンさんを見たときも、ぼくは同じような衝撃を受けましたね。ダウンタウンさんと太宰は似ている！　と。共感力もそうですが、太宰が小説でやっているようなことをダウンタウンさんは毎週コントの中でやっていた。それがテレビで見られた。ダウンタウンさんには思春期の頃、とんでもない影響を受けたと思います。」

太宰の小説は文学好きの青少年たちを「作家」にしてしまうほどの起爆力を持っているのだ。

熱烈な太宰ファンは漫画家の中にもいる。障害者を描いた『どんぐりの家』で第 24 回（1995）日本漫画家協会賞優秀賞を受賞した山本おさむがその人だ。筆者は、その山本の『津軽ー太宰治短編集』に古書店で偶然出会い（要するに立ち読みだ！)、太宰に対する熱い思いに深く打たれた。

太宰には、「自分の人生・生活が読者によく知られている（退廃的で、自殺未遂や心中未遂を何度もしている)」ことを利用した作品群がある。例えば、『道化の華』（のちに『人間失格』に発展した作品）や『富嶽百景』、『津軽』などがそれだ。後二者は教科書にもよく採られているので、我々にも全国の高校生にも馴染み深い作品なのだが、山本は研究者なみに太宰のことを調べていて、例えば『富嶽百景』など、作品を読んだだけでは知り得ないことまで補って漫画を描いている。筆者はなるほど、と書店で思わず声を挙げそうになった。

また、『津軽ー太宰治短編集』には「カチカチ山」という作品も載せられている。昔話を太宰が改作した作品で、**若い女性の残酷さ**をあますことなく描いており、我々男性陣を震え上がらせた(あなたたちの中にもこういう面ありませんか？自分を見つめるためにも是非読んでください)のだが、漫画ではこの作品にまで、太宰はこういう状況で描いたという山本の解釈がついているのだ。それがいちいち頷かせる内容で本当に感心させられた。筆者はここに、山本の、**作品や作家の奥の奥まで知りたい**という欲望をはっきりと感じた（たぶんこれは綿矢や又吉にもあるだろう)。

筆者はこれを山本の太宰に対する「誠意」と呼んでみたい。山本は明らかに売れる漫画ではなくて、描きたい漫画を描いている（実際、『津軽ー太宰治短編集』は商業ベースから外れかけたらしい。よくぞ出版されたものだ)。紙幅が尽きてきたので詳しくは書けないが、「谷口ジロー」（『孤独のグルメ』が有名）の『「坊ちゃん」の時代』や「みなもと太郎」の『風雲児たち』（長大な作品なので番外編の『蘭学事始』だけでも読んでほしい）にもそれがあるし、手塚治虫の『火の鳥』(『スターウォーズ』にも匹敵する大河漫画。新版を足女図書館にも入れた）にもそれがある。足女生には是非こういうものを手にとってもらいたいと願っている。

２年２組　　澤　井　遙　香さん　画

ああ、直木賞

図書館係　阿部健治

日本の文壇には数多くの文学賞が存在する（筆者が特に好きな、谷崎潤一郎や三島由紀夫の名を冠した賞もあるし、推理作家の登竜門である江戸川乱歩賞などというのもある。この欄で特集した本屋大賞も近年、かなり重きをなしている文学賞の一つだ。）が、それらの中でも、芥川賞と直木賞は最もポピュラーで、最も権威のある文学賞だと言ってよかろう。

両者は年 2 回、同じ日に発表されるが、その違いを詳しく知っている人はそれほど多くはあるまい。そこで少し調べてみたのだが、これが案外あいまいではっきりしない（例えば、松本清張の『或る『小倉日記』伝』は 1952 年下半期に芥川賞を受賞したが、もともとは直木賞候補だったのに、候補作の下読みをした選考委員永井龍男のアドヴァイスで芥川賞に回されたとか）のだ。

様々な情報を集約すると、両賞の違いは、芥川賞が「**純文学**の**新進**作家」、直木賞が「**大衆文学**の**中堅**作家」を対象とするという「対象の違い」に行き着くようだ。すると今度は「純文学」と「大衆文学（「エンタメ小説」などと呼ぶ人もいる）」の違いは何だというになり、これも感覚的で難しいのだが、とりあえずは、「純文学」＝「芸術性に重点を置いた作品」、「大衆文学」は「娯楽性に重きを置いたもの」と定義できる。

こう書くと、芥川賞の方が価値が高そうに思えるだろう。高校生の頃の筆者はまさにそうだった。1994 年に日本人で二人目のノーベル賞作家になった大江健三郎は 1958 年、東大在学中に「飼育」で第 39 回芥川賞を受賞したが、当時の筆者にとって「エライ作家」と言えば、この大江や安部公房らであり、直木賞受賞作家たちにはほとんど関心を持たなかった。

しかし、今は違う。若者たちは「人の世のあり方」について怒ったり、理想を語ったりしなくなった。そういうことをすると何か滑稽に見えてしまう、そんな世相のもとでは、多くの人に衝撃を与える若手作家（芥川賞は新進作家が対象だから）は生まれにくい。最近の芥川賞作品で筆者の記憶に残っているのは村田沙耶香の『コンビニ人間』（これはすごいよ！絶対に歴史に残る作品）だけである。

これに対し、直木賞の方は素晴らしい作品が続々と現れるようになった。例を挙げるならば恩田陸の『蜜蜂と遠雷』（第 165 回 2016 下半期）である。この話は国際的なピアノコンクールに挑む若者たちを描いた作品である。こう書いただけで中身は想像がつくだろう。まず筆者が思ったのは『ピアノの森』と同じではないか、ということだった。それで３年前の本屋大賞受賞作（恩田のこの作品は直木賞と本屋大賞のW受賞）なのについ最近まで未読だったのである。

本校に赴任して、渋井先生に面白かったと言われたので読む気になったのだが、いったん読み出したら止まらなかった。恩田の凄さは、それぞれが天才であるコンテスタントたちの演奏の素晴らしさを見事に描き分けていることである。また、１次予選、２次予選、決勝と彼らは３度演奏を行うわけだが、その違いも見事に描き分ける。しかも筆者のように、曲名を聞いても頭の中で音が鳴らない者にもわかるようにだ。これはいくら直木賞レベルの小説家と言っても、そうは書けない、すさまじい力業（ちからわざ）である。恩田は作家となった当初から『蜜蜂と遠雷』の構想を温めていたらしい。この作品はたぶん十年以上の準備期間を経てようやく結実したのである。

こういうものを見ると、若書き（新進作家対象だから）の芥川賞よりも直木賞に注目せざるを得ない。そして、そうした興趣を更に盛り上げるかのように、直近の直木賞、令和最初の直木賞は女流実力派作家の競演になったのである。今回ノミネートされたのは、朝倉かすみ（58）『平場の月』、大島真寿美（56）『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』、窪美澄（53）『トリニティ』、澤田瞳子（41）『落花』、原田マハ（57）『美しき愚かものたちのタブロー』、柚木麻子（37）『マジカルグランマ』の６作品。

７月のこの欄でも言ったように、筆者は原田マハのファンで、実績からいっても本命は原田、対抗は柚木麻子かな、などと思っていた。ところが、ふたを開けてみると、受賞したのはノミネート２回目の大島真寿美。この人は『ピエタ』という作品が 2012 年の本屋大賞で３位になっているから実力者だとは思っていたが、それ以外は全く知らなかったのでノーマークだった。しかし、受賞作を読むと会話のうまさが抜群（このうまさは他作でも味わえる。筆者はこの後、大島の『虹色天気雨』とその続編『ビターシュガー』を読んだが、「女同士の友情」が素敵でとても好きになった。この２作既に絶版で足女図書館では買えない。隣の市立図書館にはあるので、是非読んでみて。）で、文章がうまい作品を読み慣れた選考委員たちをも唸らせたらしい。直木賞は作品に与えられる賞で実績に与えられる賞ではないのだ。そんなことはわかっているが、改めて厳しいものだ、と感じた。

直木賞に関しては、これまでにも悲喜こもごものドラマが展開されたらしい。前述した恩田陸にしても６回目のノミネートでの受賞だった。最高記録は古川薫という人で、実に 10 回目のノミネート（1990 年下半期『漂泊者のアリア』）で受賞した。未受賞のノミネート記録は長谷川幸延、中村八朗の２名で７回。最近では人気作家の宇江佐真理が 2003 年上半期に６回目の候補で落選し、2015 には亡くなってしまったという例もある。

また、選評の不当性に抗議して人気推理作家の横山秀夫が以降のノミネートを辞退したり、５度目のノミネート（本屋大賞受賞作の『ゴールデンスランバー』）で受賞濃厚と言われていた伊坂幸太郎が、憶測記事などで紛らわされたくないという理由でノミネートを取り下げてもらったり（オリンピック代表選考なみのプレッシャーがあるということですね）、と賞の重みを表す事件は尽きることがない。今回、原田マハは４回目、柚木麻子は５回目のノミネートだった。二人とも心を折ることなく直木賞受賞（本屋大賞も）を目指してほしいものだと思う。

辻村深月の深化　　文学における「虚」と「実」

図書館係　阿部健治

高校生の時、現代文の先生が、文学者の姿勢として「芸術至上主義」（家族や生活を犠牲にするくらいでないとすぐれた芸術は生み出せない）と「生活派」（人が現に生きている、その日常と対峙することですぐれた芸術は生まれるものだ）の対立というものがあるが、どちらが正しいと思うか、と私たちに問いかけた。筆者は迷わず前者に手を挙げた。見回すと、他には２、３人が遠慮深そうに手を挙げていた。では「生活派」支持が多いかというとそうでもなかった気がずる（実はよく覚えていないのだ）。とにかく、先生はこれを受けて、私の方を見ながら（自意識過剰かも…）説明を始めたのだが、どうも先生は、どちらかと言えば「生活派」の方に与（くみ）しているように思えた。納得がいかないという記憶だけが強く残っている（記憶って本当に自分勝手だ）。

筆者はこういう傾きを持っていたから、受験勉強からも現実逃避して将棋に夢中になり、やがては対局相手も必要ない詰将棋に耽溺した（今風に言うなら「ゲーム狂」のようなものだ）。詰将棋は知的なパズル世界（当時早稲田の学生だった橋本孝治さんが作った、1525 手詰の『ミクロコスモス』という作品などはノーベル賞級の達成だと今でも思っている）で、論理的建造物とも言える偉大な芸術作品に、ひたすら酔い痴れていたのである。

それでも結局は現実世界に戻ってこないわけにはいかないから、不本意ながら教員を目指して大学入学したのだが、抜け殻のようだった筆者が特に興味を持ったのは推理小説だった。そこで描かれる「トリック」の精巧さに大いに魅せられ、最盛期には１年で 300 冊ほどの推理小説を読み、読書ノートを作って１作ごとに感想を書き、「トリック分類表」なども作った記憶がある（若さ故のひたむきさが何ともいとおしい）。

ところが、ある時期から急に推理小説がつまらなくなった。それは、一口で言えば、「ソラゴト」を追いかけ回しても空しいのではないか、と感じるようになったということである。現実には、殺人事件に出くわすことはまずないし、ましてや、トリックを駆使した「計画的殺人」などあるはずがない。もちろんそんなことは百も承知で楽しんでいたわけだが、とにかく関心がより切実な「現実生活」の方に移ってしまい、もう「ソラゴト」は楽しめなくなってしまったのである。

なぜこんなに長い前振りをしたかというと、辻村深月のどの作品にも濃厚に漂う推理小説的手法について話したいからだ。幼い頃から読書家だった辻村は小学６年生の時、推理小説作家の綾辻行人にファンレターを書き、彼に励まされて作家を志したという（辻村というペンネームは綾辻にあやかったもの）。従って「推理小説的手法」は既に彼女の作家としての骨肉を形成する抜きがたい要素となっている。これが作品の出来映えにどのような影響を及ぼすのか、このことに着目しながら、同じテーマを扱った彼女の二つの作品、『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ』（2009・第 142 回直木賞候補作）と最近作『傲慢と善良』（2019）を比べて感想を述べてみたいと思ったのである。

この２作のテーマは「**地方都市で生まれ育ち、母の言うことをよくきいて慎ましやかに生きてきた娘の自立**」というものだ。辻村は山梨県に生まれ育った。読書に耽溺する娘を、母親は愛しもし、はらはら心配もしただろう。愛するが故に娘のリスクを極力除いてやりたいと望む母と、新しい世界に飛び立ちたいと願う娘。「母娘の相克」は人間の永遠のテーマの一つであり、足女生諸君にとっては目の前に迫った課題でもある。さて、辻村はそれをどう描いたのか。
まず、２作のあらすじを記してみる。

『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ』
幼なじみの望月チエミが母親を殺して失踪。仲良しで評判だったあの親子に何があったのか。母親を殺すなら自分の方だったはずなのに。母や故郷を捨て、幸せな結婚生活を送っていた神宮司みずほは、あることに思い至り、逃げ続けるチエミの行方を追う。

『傲慢と善良』
結婚を半年後に控えた婚約者の坂庭真実（まみ）が失踪。彼女はストーカーに追われていると訴えていた。しかし、いくら調べてもストーカーの姿は見えてこない。しかし、それを調べ続けるうちに西澤架（かける）は、いやおうなく彼女の「過去」と向き合うことになる。見えているようで見えていなかった彼女の真の姿。それはどのようなものだったのか。

娘の失踪が共通している。それを追うのは、前者では幼なじみの女性、後者は婚約者だ。前者は「母娘の相克」という課題を共有する存在だということに大きな意味があり、両者（めぐみとチエミ）はそれぞれを映し出す鏡のような役割を果たし合っているのが面白い。めぐみの結婚前後から疎遠になっていたチエミを、生活の全てをかけてめぐみが捜すという設定は不自然に思えるが、実は読者を十分に納得させる理由があるのだとだんだんわかってくる。また、チエミはなぜ母親を殺したのか。本当に彼女が殺したのか。彼女はなぜ逃げ続けるのか。これらの疑問に対し、作者はラストで見事な解答を用意している。ネタバレになるので書けないが、命名の謎（「ゼロハチゼロナナって何？」）も合わせて、ミステリーファンの言う「伏線とその回収」は完璧に機能していると言ってよい。それが「娘の自立」というテーマを引き立たせ、味わいを深いものにもしている。
しかし…。「しかし」なのだ。辻村の説明は見事で、こういうことが起こったと言われれば、確かにそうかもしれないと納得はできるのだが、それでも違和感が残るのだ。殺害場面は、あり得るとは言え、ドラマチックに過ぎると感じるし、チエミの恋愛についても筆者にはかすかな違和感がある。それに比べると、『傲慢と善良』の方は全てにおいて自然で、これは現実に起こりえる（誰だって婚約者が失踪したら必死に捜すだろう）と思える。そして、真美の自立の過程も見事に書かれていて、そこに辻村作品の共通キャラ、「地域活性コーディネーター」の谷川ヨシノ（高校生の輝かしい青春を描いた名作『島はぼくらと』などに登場）が絡んでいくあたりにも、**「自立」を強調する作者の主張**を大いに感じた。
ミステリ要素を骨組みでは使いながら、全体的には抑制し、テーマをより骨太に描いた『傲慢と善良』に、辻村の作家としての確かな年輪を感じたのである。

キリノの毒にしびれてみない？

図書館係　阿部健治

桐野夏生（きりの・なつお。ちなみに女性作家ですよ）が好きだ。

筆者は、嫉妬とか恨みとか、人の「悪感情」という奴が嫌いで、そんなものに囚われるのは愚の骨頂だと思っている。世の中には、楽しいことや人を感動させることがたくさんあるのだから、それを味わって暮らした方がよいではないか。
筆者がこう思うようになったのには、中学生の時に読んだ、菊池寛の『俊寛』という小説の影響が大きい。俊寛は平安末期（1177）、平氏打倒を企てたが（「鹿ヶ谷の陰謀」）失敗し、藤原成経、平康頼と共に鬼界ヶ島に流された人物である。その翌年、平清盛は高倉帝中宮となった娘徳子の安産祈願のための恩赦を行い、その際に成経と康頼の二人は赦されたが、俊寛は島に一人とり残された。彼は絶望してこの仕打ちに深い恨みを抱く。さらにその翌年（1179）、俊寛の侍童だった有王が島を訪れ、変わり果てた主人と再会するが、有王から娘の手紙を受け取った俊寛は死を決意して、食を断ち自害する。結局、俊寛の遺灰だけが京へ戻った、と『平家物語』は語る。
菊池寛はこの話の後半部分を脚色し、一人残されて絶望した俊寛が、目の前に現れた島の娘の健康な肢体に触発され、恨みや都の生活を振り捨てて彼女と結婚するという物語に仕立てた。俊寛は有王がいくら勧めても都に戻ることを拒否する。有王は一人空しく帰京するのである。
菊池の『俊寛』は当時かなり評判になったらしく、盟友の芥川龍之介も菊池に対抗して同じ題名の小説を書いている。これも読んだが、なんか概念的にこねくりまわしている感じで、菊池の『俊寛』の方が「人間の真実」に近いと思った。以来、これが筆者の人生観の核となったのである。

筆者が原田マハや三浦しをんを愛好するのは、彼女たちの主人公が常に「前向き」だからである。そんなわけで、「イヤミス」の女王などとも言われる湊かなえなどには興味がないわけではないのだけれども、どうも触手が動かない。
そんな筆者が「毒のない小説なんて、読んだって仕方ないじゃない（『はじめての文学　桐野夏生』の著者による後書きより）」と高らかに言う桐野夏生が好きだ（今まで読んだ本のベスト１に挙げるくらいに）というのはつじつまが合わないと思われるだろう。実際、自分自身でも変だな、どうしてだろうと思いながらこれを書いているのである。

一つには、作家・作品が好きというのは理屈ではない側面があるということだろう。本当に稀だが、本を読んで、体中に戦慄が走ったり（この感覚、いちばんよく覚えているのは漫画家山岸凉子の名作『テレプシコーラ』を読んでいた時のこと。そう言えば、山岸ほどスピリチュアルな漫画家は珍しく、本来は嫌いなタイプに属するはずなのに、筆者の漫画家ベスト１は山岸。本当にわからない）、体の奥深くがカッと熱くなったりする（桐野を読む時はどちらかというとこっち）ことがある。読書の醍醐味とはまさにこれだと思っている。

しかし、これだけでは申し訳ないから、もう少し分析を試みよう。筆者が桐野夏生を好きなのは何より彼女が**潔い**からだと思う。桐野は「優れた小説には、いいことばかりは書いてありません。人間の弱さや狡さ、愚かさ、利己的な面が、きちんと書かれているはずです。」と言う。彼女の作品には、どれにも、人が隠そうとする毒を白日の下に引きずり出して、みんなに見せてやる、これでどうだ、という気概が感じられる。その際、桐野はもちろん権力の悪も暴こうとするが、抑圧される側の悪も遠慮なく描き出す。その様がいかにも痛快なのである。

桐野の作品を語る上では『ＯＵＴ』（1997）という作品に触れないわけにはいかない。この作品は日本人作家の手によるものとして初めてエドガー賞（米ミステリ作家クラブ賞）の最終候補にノミネートされた（2004）。受賞は逸したけれども、英訳されて海外でも広く読まれなければ（これが日本人作家の大きな壁になっていた）ノミネートされないのだからこれは快挙であった。その後、東野圭吾の『容疑者Ｘの献身』（2012）、湊かなえの『贖罪（しょくざい）』（2018）と日本人作家のノミネートは続いている。また、横山秀夫の『６４』もダガー賞（英国推理作家協会）の最終候補５作に残った（2016）。日本人のミステリも世界レベルになったわけだが、桐野の『ＯＵＴ』はその先駆けになったのである。
また、『ＯＵＴ』は朝日新聞が識者 120 人にアンケートした「平成の 30 冊」（あらゆるジャンルの書物対象）で、宮部みゆき『火車』（1992）と並んで４位に入っている。ちなみにこのアンケートの１位は村上春樹の『１Ｑ８４』（2009）、２位はノーベル賞を受けた日系英国人作家カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』（2006）、３位は町田康の『告白』（2005）であった。他にめぼしいものを拾うと８位に小川洋子の『博士の愛した数式』（2003）が、11 位に村田沙耶香の『コンビニ人間』（2016）が入っている。
ネタバレは避けたいので、本当に簡潔に言うが、『ＯＵＴ』は「社会の片隅に追いやられた主婦たちが、深夜の弁当工場で出会って連帯・覚醒し、社会に復讐する」という話である。この「深夜の弁当工場」というのが実に秀逸。1990 年代の社会的状況をこれ以上なく雄弁に語っている。この時の桐野はまだ売れっ子作家というほどではなく、作家生命を賭けて一人で必死に取材したらしい。そのエネルギーは行間からほとばしっているが、ハードボイルドを愛するアメリカ人たちはそこに動かされたのではあるまいか。

そんな桐野が震災直後から４年がかりで完成させた大作が『バラカ』だ。福島第一原発の４号機までが全て爆発し、東京を含む東日本全域が放射能に汚染されたという設定だ。首都は大阪に移され、社会の上層部の人々は皆、西日本に移ってしまったが、東日本には、ゴースト化した町もあるものの、かなりな数の人間（西に移る経済的ゆとりがなかった人）が生き残り、苦しみながら毎日を送っている。そういう人たちを描いているのである。この小説も「４号機までが全て爆発」という設定が秀逸だ。東京人も栃木県に住む私たちも何事もなかったように暮らしているが、実は「４号機まで全て爆発」というのはかなりの確率で有り得る話だった。本当にぎりぎりの所でそうならなかった。
この小説は、その時どうなるかというシミュレーション小説である。桐野の想像力のリアルさはすごい勢いで読む者に迫ってくる。いや、実に恐ろしい。

そうした桐野夏生の力の一端を知ることができるのが『はじめての文学　桐野夏生』だ。この本の謳い文句は「**キリノの毒にしびれてみる**。」である。はじめての読者向けでも桐野夏生は決して容赦せず、凄まじい毒を吹きかけてくる。けれど面白さの方は保証しよう。味わって見なければ何事もわからない。覚悟を決め、敢然と桐野に挑む勇者の出現を待ちたい。

今月はとにかく読みやすくて楽しいおすすめ本を紹介！

　冬休みは是非読書に勤（いそ）しんでもらいたい（「いそしむ」って、この漢字を使うんだね。「今でしょ」の林先生が出題しそうな読みだ！）ということで、今月は、「もうこれしかない」というとっておきの作品を紹介しよう。

「はじめての文学シリーズ」
　日本を代表する 12 人の作家による、***はじめての読書***向けに***本人自らが選んだ***作品集。
表現も平易なものが多く、長いのでも 50 ページくらい。短編小説と呼べるサイズで、見開き 1 ページのショートショートもあるし、10 ページくらいのもけっこうある。しかし、そこは一流作家、それも数多くの作品中から本人が特別に選んだものだから短くてもいろいろと仕掛けがあって面白い。それぞれの中からオススメの作品を紹介しよう。

　まずは**村上春樹・よしもとばなな・川上弘美・桐野夏生**の４人。この人たちは海外の文学賞の受賞（またはノミネート）歴がある国際派作家だ。
　村上春樹の長編は難解なのもあるが、文章自体はすごくリズムがよくて読みやすいから短編はおすすめ。ボクシング好きの筆者は「沈黙」という作品を偏愛している。作者自身はこういうド直球の作品は苦手らしいが、筆者はこういうのが好き。わかりやすくてセンスを感じる「鏡」もいい。
　よしもとばななはイタリアの文学賞をたくさん受賞していて、海外では村上に次ぐ知名度がある。日大芸術学部の卒業制作である「キッチン」はもちろんいいが、教科書にも載っていた「バブーシュカ」を推しておく。この集には入ってないが、筆者はよしもとの短編「みどりのゆび」が大好き。また、これは長編だが彼女の作品では何と言っても『ＴＳＵＧＵＭＩ』が最高。読後、主人公のつぐみが何ともいとおしくなる。
　川上弘美は 60 代の元高校国語教師（松本春綱という名前だ）と 30 代後半の教え子「ツキコ」さんの恋愛を描いた『セイセイの鞄』で有名になり、これで国際的な評価が高まった（すごく日本的な世界を描いているのにね）。集中には、この作品の番外編「パレード」もあるが、これは『セイセイの鞄』を読んでからの方がいい。代わりに「草の中で」を挙げておくがこれは深い。これこそ文学だ、と思う。
　桐野夏生は先月号でも触れた。「アンボス・ムンドス」がすごい。設定が見事。「若い女の子の残酷さ」（これは既に文学的テーマだ。太宰治「カチカチ山」を是非読んで）を完璧に描いている。桐野は教育現場についてもよく知っているなあ、と感心した。女子プロレスの世界を描いた「嫉妬」もすばらしい。これは誰もが共感できるのではないか。

小説は「人間の心」を知る練習問題だ

図書館係　阿部健治

まず、次の文章を読み、その後の設問に答えてもらいたい。本文は三島由紀夫作『真夏の死』という短編の一節である。実は１年生の１月実力テストで出題したのだが、**正解率は1割未満**であった。簡単なはずのこの問題が解けないのはなぜなのか。筆者はズバリ、この背景には諸君の**読書不足**があると見た。

七七忌がすぎる。夫婦は多磨墓地に土地を買った。分家の最初の墓がそこに建ち、最初の死者が埋められることになるのである。

悲しみは、①朝子の危惧に反して、また日に新たに日にこまやかになった。夫婦は買った土地を見に、子ども連れで墓地へ出かけた。すでに初秋である。

三年以上たった夫婦の間には、まじめな事柄というものは何一つありえないのが本当だが、悲嘆は二人を別々な色合いでまじめにしていた。一緒に出かけるときなどは一層そうであった。第三者の目には、これだけが夫婦の共通点とも紐帯とも見えるはずだから、勝（まさる）と朝子（ともこ）は生真面目さにほれ合って結ばれた夫婦のように見えたであろう。その日はまことによい日で、暑さはすでに空高く遠のいていた。記憶はわれわれの意識の上に、時間をしばしば並行させ重複させる。朝子はこのふしぎな作用を、その日に二度経験した。それはその日の空気と日光があまりに澄明で、朝子の心の無意識の領域までが、日を浴びて半透明に明るんでいたせいかもしれない。※あの事件の二カ月ほど前、勝は無傷であったが自動車事故を起こしたことがある。事件後朝子は克雄を連れて出かけるときには、決して良人（おっと）の車に乗らなかった。今日は御相伴で、勝も電車で行かねばならない。

多磨墓地行きの小さな汽車に乗り換えるために、M駅で省線電車を降りたときのことである。勝は克雄を抱き上げて先に降り、朝子はこれにつづいて降りた。降車の客はかなり多かったので、朝子が降りたのはドアが閉まる寸前であった。彼女は自分のうしろに鋭い呼笛とともに閉まる扉を見た。そしてほとんど叫んで、その閉まらんとするドアを自分の力で引き開けようとした。一緒に連れてきた清雄と啓子を、車内へ残してきたような気がしたのである。不審そうに良人が朝子の腕をとらえた。彼女は人中で刑事に腕をとられた女のように、一種不敵な態度で良人を見返した。次の刹那には冷静に返って、その錯覚を丹念に話したが、きいている良人は何かきまりのわるさを感じた。妻が感情を誇張していると感じたのである。

追憶をわが手の中に、あるいは一つの身振り、一つの現前の行為の中に、とらえようとするこうした衝動的な熱情を、勝がわざとらしいと感じたのは正当であろうか？朝子は生きることのもどかしさを、大変つたなく訴えたのである。墓地行きの古風な小さい汽罐車が、幼い克雄を喜ばせた。それはラッパ型の煙突を持ち、奇妙に背が高くて、高下駄をはいているようであった。黒くすすけて、機関士のひじを掛けている木製の窓枠は、炭で作ったもののように見えた。汽罐車は、永いこと、つぶやいたり、ため息をしたり、歯ぎしりをしたりしてから、郊外の平凡な田園の中へ旅立った。

（注）※あの事件……朝子と勝の子どもである清雄と啓子が海で溺死した事件。夫婦にはたった一人、克雄という息子が残された。

設問　傍線部①「朝子の危惧（「おそれあやぶむこと」）」とは、どのようなことと考えられるか。30 字以内で説明せよ。

１年生覚えているかな？２年生のみなさん（先生方も）、どうであろうか。

この問題、実は**傍線部を含む一文だけで解決**する。「悲しみは、朝子の危惧に**反して**、また日に新たに日にこまやかになった」という一文だ。「反して」とあるのだから、論理的に考えて、「朝子の危惧」とは、まずは「『悲しみ』が『日に新たに日にこまやかにな』らないこと」となるであろう。このうち、「日に新たに日にこまやかになる」とは、「日がたっても薄らがない」ということだから、それに反するのなら「日がたつにつれて（悲しみが）薄れること」となる。設問の要求が 30 字なので、重要情報である「何の」悲しみかを書き加えた（記述問題の解答を作る上ではこのプロセスも大切ですよ）、「時がたつにつれて、子を失った悲しみが薄れるということ。（27 字）」が模範解答となる。

以上のように、易しいと思われる設問の正解率がこんなに低いのはどうしてか。第一に「**文脈をきちんと追う**」という基本が身についてないからだろう。採点をしていても、本文中のこのあたりを引用しておけばいいんじゃないの、という安易なものに多く接する。漢字の書き取りでも、まるでワープロの変換ミスのような（例えば「拘束」を「校則」とするような）語を書いて平気な顔をしている解答（顔は想像だが）が少なからずあるが、これらもその一環であるように思われる。そして、より本質的な問題として「読書不足」があると筆者は思うのである。本問の正解率が低いのは、諸君に「悲しみはできるだけ早く薄れた方がいい」という思い込みがあるからではないか、と筆者は推測した。しかし、**人の心は実はもっと複雑だ**。朝子ももちろん苦しさからは逃れたかったが、二月ほどして、悪夢にうなされることなく、すっきりした気分で目覚めてしまった彼女は、死んだ子に申し訳なく感じて涙を流すのである。「**悲しみを忘れることは子に対する裏切り**」。これもまた、人の心の真実なのである。

皆さんはもちろん、親ではなく、ましてや子に死なれた親ではないが、読書によって、そういう人の心の真実を追体験することができる。これは実に大切なことであり、**素晴らしいこと**だと筆者は思うのである。

※臨時休校のため遅くなりましたが、作成当初の「２月号」のままとしました。